

## L01a 摂動分を除く太陽系惑星の近日点移動量の計算

藤原 ケイ

筆者は、「太陽黒点相対数と”エルスト・ピサロ彗星と木星の相対位置”が連動している」可能性が高いことを先の大会で講演した。(2017 秋、2018 春. 133P/エルスト・ピサロ彗星) 具体的に書くと、「黒点は彗星が発生させ、そのなかで 133P が最も強く作用し、木星と外合のとき発生数が極大になる」ということである。

また、地球の気象では、「周期彗星と地球が内合のとき 竜巻等が多発している状況」を見出し、気象学会で講演した。(2018 春)

これら「木星・彗星と太陽」、「彗星と地球」での関係を合理的に説明するには、「太陽に向う未確認の流れ」の存在が必須であると考えている。

そこで「未確認の流れ」が存在するのなら惑星軌道運動に対しても何らかの変化を与えているはずと考え、「近日点移動」がその一つかも知れないとして取り上げた。摂動によるものを除いた、いわゆる相対論的效果と言われる部分である。結果として、惑星軌道の微分方程式の、通常は中心力としての引力項  $\{-GM/r^2\}$  だけであるところに、微小の斥力項  $\{+6 \cdot (GM/c)^2/r^3\}$  を付加することで、よく知られた解と同一の結果を得た。

講演では背景および計算内容と、付加項の物理的解釈、「未確認の流れ」との関係などについて報告する。